

肺「ヂストマ」ノ研究拾遺 其ノ二

肺「ヂストマ」ノ定住的寄生要約

(本蟲ノ固有寄生地ニ關スル見解)

醫學博士

橫川 末盛 進 定

本蟲ハ發育ノ前期、特ニ幼若期ニアリテハ終宿主ノ體腔又ハ體腔ニ接スル緩組織内ニアリテ、一定ノ發育ヲ遂ゲ、中期以後ニ至リテ始メテ肺臓内ニ進入シ、其ノ部ニ寄生生活ノ根據ヲ置クモノニシテ、肺臓以外ノ臟器組織内ニ寄生セルモノハ成蟲トシテ、長ク生存シ得ルモノニ非ズ、然レドモ何故發育ノ初期ニ於テ肺臓内ニ侵入セザルヤハ未決ノ問題ニシテ、被囊ヨリ遊離シタル直後ノ幼「ヂストマ」ヲ直接、肺臓内ニ輸入シタル場合ニ取ルベキ幼「ヂストマ」ノ態度モ亦、不明ナリシカバ、余等ハ是等ノ問題ヲ解決センガタメ、人工消化法ニ依リテ被囊ヨリ遊離セシメタル、活潑ナル幼「ヂストマ」ヲ特種ノ「いるりがごる」ヲ用ヒテ動物ノ頸靜脈内ニ輸入シ、幼「ヂストマ」ヲシテ直接肺臓内ニ輸達セシメ、以テ其ノ後ニ於ケル幼「ヂストマ」ノ態度ヲ知ラントシ、左ノ實驗ヲ行ヘリ。

〔第一實驗例〕 犬 第二十七號

大正七年五月十四日、人工消化法ニ依リテ、被囊ヨリ遊離セシメタル、幼「ヂストマ」四十疋ヲ生理的食塩水ト共ニ左側ノ總頸靜脈ヨリ輸入シ、直接肺臓ニ輸達セシム。

同年六月三日、屠殺解屍ス、試験後經過日數二十日。

〔解屍所見〕 小犬 營養不良

腹腔ヲ開檢スルニ、腹腔内ニハ帶黃色澄明ノ液體ヲ含有スルコト、約五

〇〇c.c. 腹腔内臓ハ一般ニ蒼白ナル外著變ナシ、腹腔内臓ヲ洗滌シテ精査セシモ、幼「ヂストマ」ヲ認メズ。

胸腔ヲ開檢スルニ、胸腔内ニハ少量ノ帶黃色澄明液ヲ含有シ、兩肺肋膜面ニハ麻仁大以下ナル數箇ノ點狀溢血ヲ認メシモ、蟲結節乃至限局性硬結ヲ認メズ、前縦隔膜及體壁肋膜ニ著變ナシ。

胸腔内ニ於テ幼「ヂストマ」四十疋ヲ證明セリ。

〔第二實驗例〕 犬 第二十八號

橫川 末盛 肺「ヂストマ」ノ研究拾遺

横川、末盛一肺「ガストマ」ノ研究拾遺

八七八

大正七年五月二十四日、前記ノ方法ニ依リテ、遊離幼「ガストマ」八十九疋ヲ左總頸靜脈ヨリ輸入ス。

同年六月八日、屠殺解屍ス、試験後經過日數十五日。

〔解屍所見〕 中犬 營養稍不良

腹腔ヲ開檢スルニ、腹腔内臟ハ一般ニ血液ニ富ミ、肝臟ハ特ニ著シク、暗紅色ヲ呈セリ、肝臟ノ表面ニ於テ二疋ノ幼「ガストマ」ヲ認メシモ、其ノ部ニ出血其ノ他ノ變化ヲ認メズ、又腹腔ヲ精査セシモ他ニ幼「ガストマ」ヲ認メズ。

胸腔ヲ開檢スルニ、胸腔内ニハ少量ノ漿液ヲ含有セリ、兩肺肋膜面ニハ、多數ノ麻仁大以下ナル溢血斑ヲ形成ス、此ノ溢血斑ハ右側ニ多ク、特ニ各葉ノ下面ニ於テ著シ、前縱隔膜ハ僅ニ肥厚シテ、汚穢色ヲ呈シ、二三ノ稍、著明ナル小溢血斑ヲ形成セリ、體壁肋膜及橫隔膜ニハ不正線狀ノ出血ヲ現ハセル所アリ、心嚢ヲ開檢スルニ心臓ノ外面ニ於テ、二箇ノ線條出血ヲ認メ、右心耳ノ外面ニ於テ暗褐色ヲ呈セル小疣狀結節ヲ證明セリ。

胸腔内ニ於テ六疋ノ幼「ガストマ」ヲ證明セリ。

〔第三實驗例〕 犬 第二十九號

大正七年五月二十四日、前法ニ從ヒテ活潑ナル遊離幼「ガストマ」一八六疋ヲ左側ノ總頸靜脈ヨリ輸入ス。

同年六月十三日夜死亡、翌日解屍ス、試験後約二十日。

〔解屍所見〕 中犬 營養不良

腹腔ヲ開檢スルニ、腹腔内臟ハ既ニ腐敗ニ傾キテ、特種ノ腐敗臭ヲ放チ、肝臟ハ軟化シテ汚穢色ヲ呈シ、大網膜ニハ大小數箇ノ瓦斯胞ヲ形成セリ、

腹腔内臟ヲ精査シテ幼「ガストマ」五疋ヲ證明セリ。

胸腔ヲ開檢スルニ、胸腔内臟モ亦、多少腐敗ニ傾キ汚臭ヲ放テリ、兩肺肋膜面ニハ「レンズ」大以下ナル多數ノ溢血斑及肋膜下空胞ヲ形成シ、表面不潔ニシテ特種ノ外觀ヲ呈セリ、前縱隔膜ハ僅ニ肥厚シテ、汚穢色ヲ呈シ、二三ノ小空胞ヲ形成セリ、心嚢ヲ開檢スルニ、心臓ノ前面冠狀溝ニ沿ヒテ二三ノ不正點狀ノ溢血斑アリ、體壁肋膜及橫隔膜ニハ多數ノ不正線狀ノ出血斑アリ。

肺ヲ切檢スルニ、切面ハ淡紅色ニシテ液質及空氣ニ富ミ、表層ニ近ク數箇ノ稍ノ高度ナル出血竈ヲ認ムト雖、蟲囊胞乃至固有ノ蟲結節ヲ認メズ。

胸腔内ニ於テ、通計四十六疋ノ幼「ガストマ」ヲ證明セリ。

〔第四實驗例〕 犬 第三十號

大正七年五月二十五日、前法ニ從ヒテ、遊離幼「ガストマ」二五三疋ヲ左側ノ總頸靜脈ヨリ輸入ス。

同年六月八日死亡、即日解屍ス、試験後十四日。

〔解屍所見〕 中犬 營養不良

腹腔内ニハ少量ノ帶黃色澄明液ヲ含有ス、腹腔内臟ハ一般ニ蒼白ナル他、著變ナシ。

胸腔ヲ開檢スルニ、左右胸腔内ニハ帶黃紅色ノ澄明液ヲ稍々多量ニ含有セリ、前縱隔膜ハ一般ニ浮腫シ、其ノ一部ニハ指頭大ノ水嚢腫ヲ形成シ、心嚢ノ外壁ニ沿ヒテ垂下シ膠樣透明ノ外觀ヲ呈セリ、兩肺肋膜面ハ滑澤ニシテ麻仁大以下ナル、多數ノ溢血斑ヲ形成セリ、此ノ溢血斑ハ暗褐色ニシテ右側ニ多ク、特ニ各葉ノ下面ニ於テ著シ、之ヲ切檢スルニ切面ハ概シテ

微紅色ニシテ、空氣ニ富ミ、特殊ノ變化ヲ認メズ、橫隔膜及體壁肋膜ニハ不正線狀ノ小出血斑ヲ認ム。

腹腔内ニ於テ幼「ガストマ」五疋ヲ證明シ、胸腔内ニ於テ二十二疋ヲ證明セリ。

〔第五實驗例〕 犬 第三十一號

大正七年五月二十七日、前法ニ從ヒテ、遊離幼「ガストマ」六八疋ヲ左側ノ總頸靜脈ヨリ輸入ス。

同年六月十九日屠殺解屍ス、試験後二十三日。

〔解屍所見〕 中犬 營養稍々不良

腹腔ヲ開檢スルニ、腹腔内ニハ少量ノ帶黃色澄明液ヲ含有セル他、特ニ記載スベキコトナシ、腹腔内ヲ精査セシモ幼「ガストマ」ヲ認メズ。

胸腔ヲ開檢スルニ、兩胸内ニハ帶黃色澄明ノ液體ヲ稍々大量ニ含有セリ、兩肺肋膜面ニハ「レンズ」大乃至麻仁大以下ナル多數ノ點狀出血アリ、特ニ左肺ニ於テ著シ、之ヲ切檢スルニ、切面ハ淡紅色ニシテ血液及空氣ニ富ミ、表層ニ於テハ限局性ノ出血竈ヲ認ムルモ、固有ノ蟲結節乃至蟲囊腫ヲ認メズ、前縱膜ハ稍々肥厚シ、汚穢色ヲ呈スト雖、著シカラズ、體壁肋膜及橫隔膜ニハ比較的多數ノ不正線狀ノ小出血斑アリ。

胸腔内ニ於テ幼「ガストマ」九疋ヲ證明セリ。

〔第六實驗例〕 犬 第三十二號

大正七年五月二十八日、前法ニ從ヒテ遊離幼「ガストマ」四六疋ヲ左側總頸靜脈ニ輸入ス。

同年六月十五日朝死亡、即日解屍ス、試験後十八日。

横川、末盛「肺「ガストマ」ノ研究拾遺

〔解屍所見〕 中犬 營養不良

腹腔ヲ開檢スルニ、小腸ノ下部ニ於テ二三ノ小出血點ヲ證明セリ外、著變ナシ、腹腔ヲ精査シテ幼「ガストマ」二疋ヲ證明セリ。

胸腔ヲ開檢スルニ、兩肺肋膜面ニハ「レンズ」大以下ナル多數ノ小溢血斑ヲ形成セル外、特別ノ變化ヲ認メズ、心臟ノ前面特ニ右房壁ニ於テ一箇ノ小溢血斑アリ、前縱隔膜ニ著變ナシ、體壁肋膜及橫隔膜ニ幽微ノ線狀出血アリ。

胸腔内ニ於テ幼「ガストマ」十七疋ヲ證明セリ。

〔第七實驗例〕 犬 第三十三號

大正七年五月三十日、前法ニ從ヒテ遊離幼「ガストマ」三十六疋ヲ、左側總頸靜脈ニ輸入ス。

同年六月七日死亡、即日解屍ス、試験後八日。

〔解屍所見〕 中犬 營養不良

腹腔ヲ開檢スルニ、腹腔内臟ハ一般ニ蒼白ナル外、著變ナシ、腹腔内ニ於テ幼「ガストマ」ヲ認メズ。

胸腔ヲ開檢スルニ、左右胸腔内ニハ大量ノ汚穢潤濁セル液體ヲ含有セリ、兩肺肋膜面ハ不潔ニシテ汚穢潤濁シ、一般ニ黃灰色ノ膿樣絮片ヲ附着セリ、右肺ノ上葉竝ニ中葉ニハ麻仁大以下ナル黃褐色ノ點狀出血アリ、下葉ハ灰白色ニシテ一般ニ抵抗強シ、左肺肋膜面ニモ亦所々ニ黃褐色ノ點狀出血アリ、中葉竝ニ下葉ノ一部ハ灰白色ニシテ抵抗強シ、肺ヲ切檢スルニ、右肺ノ下葉及左肺ノ中葉竝ニ下葉ノ一部ハ、黃灰色ヲシテ殆ド空氣ヲ含有セズ、壓迫スルニ僅ニ泡沫ヲ含有セル膿樣物ヲ流出ス、其ノ他ノ肺組織モ亦、多

横川、末盛「肺」ガストマ」ノ研究拾遺

少抗抵抗ク一般ニ液質ニ富メ、

胸腔内浸出液並ニ胸腔内臓ヲ精査セシモ、幼「ガストマ」ヲ認メズ。

〔第八實驗例〕 犬 第三十四號

大正七年五月三十日前法ニ從ヒテ遊離幼「ガストマ」六十疋ヲ左側頸靜脈ニ輸入シ、試験後一時間ヲ經テ屠殺解屍ス。

〔解屍所見〕 犬 營養佳良

斯クノ如ク、頸靜脈ニ輸入セラレタル幼「ガストマ」ハ右心竝ニ肺動脈ヲ經テ直接肺臓内ニ到達スト雖、長ク其ノ部ニ定住スルコトナク、早晚肺臓ヲ辭シテ胸腔内ニ匍ヒ出デ、更ニ肺肋膜面、或ハ體壁肋膜下ニ侵入シテ、其ノ部ニ點狀乃至線狀ノ出血ヲ現ハシ、又ハ橫隔膜ヲ穿通シテ、逆ニ腹腔内ニ出デ、其ノ部ヲ徘徊スル等、發育ノ初期ニアリテハ體腔乃至之ト關聯セル臟器組織内ニアリテ種々ナル傷害ヲ及ボスコト彼ノ被囊「ちゑるかりや」ヲ餌食セシメタル際ニ見ルト異ラズ。

今切片標本ヲ作リテ檢スルニ、第三十四號犬(幼蟲輸入後約一時間)ノ肺臓ニアリテハ、殆ド特別ノ變化ヲ呈スルコトナク、肉眼的ニ證明シ得タル、小溢血部ニ於テハ稍々高度ノ出血ヲ呈シ、出血竈内ノ一肺胞内ニ幼「ガストマ」ノ嵌止セルコトヲ證明セリ、故ニ頸靜脈ヨリ、肺動脈ヲ介シテ直接肺臓内ニ輸送セラレタル幼「ガストマ」ハ肺動脈ノ末梢毛細管部、或ハ之ニ近キ部ヨリ、肺胞内ニ逸出シ、終ニハ胸腔内ニ移行スト雖、其ノ當時ニアリテハ、蟲體矮小ナルガタメ、其ノ部ニ著明ノ變化ヲ顯ハスコトナクシテ、容易ニ胸腔内ニ移行シ得ラル、モノ、如ク、試験後一定期間ヲ經タル後ニ見ラル、肋膜ノ變化ハ胸腔内ニ於テ一定ノ發育ヲ遂ゲタル幼「ガストマ」ノ侵襲ニ因リテ生ジタルモノナルベシ。次ニ胸腔内ニアル幼「ガストマ」ノ肺臓内ニ侵入スル模様ヲ觀察スルニ、多クハ二蟲相接シテ肺肋膜面ヨリ侵入シ、一定ノ場所ニ至リテ定住ス、此ノ時期ハ大抵試験後三十日前後ニシテ、其ノ體内ニ生殖腺ノ發達シ初メタル頃ニ相當ス、此ノ時期以前ニアリテハ、普通肺臓内ニ侵入スルコトナク、假令其ノ中ニ侵入スルコ

本試験ノ目的ハ、遊離幼「ガストマ」ノ直接肺臓内ニ到達シタル際如何ナル所見ヲ呈スルカヲ知ランガ爲メニ行ヒタルモノニシテ、未ダ心動ノ全ク停止セザル際胸腔ヲ開キシカバ、出血甚シク爲メニ胸腔内ニ大量ノ血液流入シ、胸腔内ニ於ケル幼「ガストマ」ノ存否ヲ知ルコト能ハザリシト雖、肺臓ハ一般ニ淡紅色ニシテ、所々ニ刺シタル程ノ小溢血點ヲ證明セシニ過ぎズ、切面ニ於テモ亦、特別ノ變化ヲ認メザリキ。

トアルモ、再遊出シテ他ニ轉ジ、決シテ一所ニ定住スルコトナシ、又此ノ時期以後ニアリテモ、單獨ニテ肺組織内ニ侵入シタルモノハ、他蟲ノ來リテ同棲セザルトキハ、再ビ他ニ轉ジテ、其ノ部ニ空囊胞又ハ限局性炎竈ノミヲ貽スコトアリ、之ニ反シ他蟲ノ來リテ同棲スルトキハ、玆ニ定住シテ囊腫ヲ形成シ一囊二蟲又ハ一囊三蟲共棲ノ像ヲ呈ス、思フニ生殖腺ノ發達ト共ニ配偶者ヲ欲求スルハ生物ノ通性ニシテ敢テ恠ムニ足ラズト雖、内臟寄生蟲ニシテ本蟲ノ如ク、露ハニ之ヲ示スモノハ稀ナリ、二蟲相愛ノ事實ハ單ニ肺臟ニ於テ見ラル、ノミナラズ、橫隔膜ニ於ケル對性穿孔ニ依リ、又腦内移行ノ適例トシテ余ノ注意シタル試驗犬戊號及R號(日新醫學號)ニ於テモ亦之ヲ證明シ得ベシ、後ノ場合ニ於テハ遠ク胸腔ヲ離レタル側頸部ニ於テ二蟲或ハ三蟲相追躡シ居リシモノニシテ、少シク注意スルトキハ、他ノ場合ニ於テモ亦略同様ノ事實ヲ證明シ得ベシ、即チ一定ノ發育ヲ遂ゲタル幼「ヂストマ」ハ夙ニ對手ヲ索メテ所在ニ出沒シ、之ニ伴フ病理的變化ヲ貽スモノニシテ、發育ノ中期以後ニ於テハ、自ラ種族繁殖ノ計ヲ立テ、特ニ配偶者ヲ選ミテ卵子排泄ノ便アル肺臟ニ寄生定住スルガ如キ、高等靈長類ノソレニ類スルモノアルハ、洵ニ驚嘆ニ値スベク、嘗テ恩師桂田博士ガ猫及犬ニ寄生セル本蟲ハ、殆ド常ニ一囊内ニ二蟲ナルニ反シ、人肺ニアリテハ一囊一蟲ナルコト多キ事實ヲ見テ、本蟲ハ元來一囊内ニ二蟲共棲スルコトヲ希望スルモノニシテ、犬及猫ノ如キ小動物ニアリテハ、兩蟲相遭遇スルコト容易ナルモ、人肺ニアリテハ其ノ容積大ナルガ爲メニ、兩蟲ノ相遭遇スルコト困難ナルニ依リ、一囊一蟲ニシテ終ルモノナランカト云ヘルハ眞ニ達識ト云フベシ、從テ本蟲ハ發育ノ時期ニヨリ、終宿主ノ體内諸所ニ見出サルト雖、發育ノ後期ニ在リテハ普通肺臟内ニ寄生定住スルモノナルガ故ニ、肺臟ヲ以テ固有ノ寄生地ト見做スベク、肺臟以外ノ臟器組織内ニ定住的寄生ノ根據ヲ有シ一定ノ變化ヲ呈スルトキノミ之ヲ異所寄生ト見做スベキモノナラン、然レドモ發育ノ中途ニアリテ依然放浪生活ヲ營ミツ、アル時代ノ幼「ヂストマ」ニ對シテ、異所寄生ナル名稱ヲ附スルハ蓋シ穩當アラザルベシ。